

六人部是香書き入れの「建久五年本古今集」

「Kenkyu Go-nen Kokinsyju」 noted by Yoshika Murobe

森 本 茂

序

「古今集」の伝本の一つである「家隆本」は、西下経一氏の「古今集の伝本の研究」の中にみえ、東京大学国語研究室の所蔵になる。西下氏の御調査によると、この本ははじめに仮名序をおき、歌は巻一から巻六まであり、その次に真名序をおいている。この本は清輔の要素をかなり多くもつが、一方には元永本・雅経本の要素をももち、またこの本独自の本文もあるので、中間本とみられる。この本は近年、西下氏・滝沢貞夫氏編の「古今集校本」に「伝家隆筆切」として、校異本の一つに採られている。

また、西下氏の前書の中で、清輔本の「その他」の所に、六人部是香の「古今集撰輯考」にみえる、是香の友人の賀茂直兄の秘蔵本である「建久五年本」（一冊・零本）の名があがって

ている。この本は上巻だけで、奥書に「建久五年閏八月廿一日、書之中門下房」とあるが署名がない。巻頭に真名序があり、白紙一枚へだてて、その裏に通宗の識語がある。是香は「六七百年以前の古書なるべき事は決して違ひ有まじき」といい、家隆筆と鑑定されている。

この是香の見た賀茂直兄の秘蔵本（建久五年本）とみられるものは、是香の「古今和歌集」（上・下冊、上冊に巻一―十、下冊に真名序）に傍記・対校されている。私はそれをもう十年ほどの昔、京都府向日市にある是香の生家（向日神社）で見せていただき、ノートに書き写したことがある。それからそのまま放置していたが、最近取り出して、前記の校本の「伝家隆筆切」と対比してみると、かなり異同もありそうなので、この際、ノートの「建久五年本」を活字化しようと思ったわけである。ただ、最近もう一度見せていただきたいと思い、是香の生家に

お願いしたが、近年の改築時にその本は行方不明になったというので、残念ながら記述内容を確認することはできなかった。

この是香の傍記・対校した本の奥書には、「建久五年閏八月廿一日、書之中門下房也」とあり、その次に「賀茂直兄縣主の所蔵古本古今集、上巻一冊、壬生中納言家隆卿真蹟のよし、其名なければ真偽は知られねど、六七百年来の古本には違ひあるまじく……嘉永四年三月廿九日 六人部是香」とある。また、仮名序のあとの帖紙に、「家隆卿真蹟古本ハジメニ真字序を筆テ其ウラノ白紙ニ左ノ端書アリ 本云 以貫之自筆本書写古今也 件本於皇太后宮燒畢云々和歌等不似余本其説頗違矣 通宗」とある。是香の「古今和歌集」の中には「β本」として傍記してあるが、春歌上の見出しの下に「β本は家隆卿自筆本也、今此印本ニ校ス、印本ニ同ジキ処々ハ、ソノママニテオケリ」という是香の注記がある。以上によつて、この傍記・対校の本は、賀茂直兄の秘蔵本で、伝家隆筆の「建久五年本」であると思われる。

以下、1・2などの数字は「古今集」の歌番号、――線の下が「建久五年本」の本文である（イ校はその本にイ校とあるもの）。是香の注記や帖紙のことは、後に一部だけかかげた。

仮名序

をとこ女―をとこをうな あまのうきはしのしたにてめ神を
 神となりたまへることをいへるうたなり―ナシ つたはること
 ーつたはれること うたのもじ―うたはもじ 人の世となりて
 すさのをのみことよりぞみそもじあまりひともしは―人の世と
 なりてよりぞみそもぢあまりひともしは 宮づくり―室づくり
 あはれみ―あはれび かなしむ―かなしぶ あま雲―あま雲の
 このうたもかくのごとく―ナシ おほんはじめなり―おほんは
 じめのはじめなり つきたまはで―つけ（イ校き）たまはで
 いぶかり―いぶち（イ校かり） ことのはは―ことばは から
 のうたにも―からのうたも さくやこの花といへるなるべし―
 さくやこの花といふるなるべし たちちね―たちちめ とのづ
 くりせりといへるなるべし―とのづくりせりといへることのた
 ぐひなるべし これは世をほめて：えあるまじき事になん―ナ
 シ さかし―かしこく なぐさめける―なぐさみける くれ竹
 のうきふしを―くれ竹のをきふしをつたはるうちにも―つたはる
 うちに しろしめしたりけん―しろしめしけん おほきみつ―
 おきみつ 錦とみたまひ―錦とみえ 雲かとのみなん―雲かと
 ぞ たえずぞありける―たえがたくなんありける これよりさ
 きの―かかりけるさきの あつめてなん―あはせ（イ校三本）
 てなん ひとりふたりなりき―ひとりふたりなり しかあれど
 ーナシ かの御時より―かのとしより たかき人をば―たかき
 をば 僧正遍昭―僧遍照（以下皆同じ） うたのさまは―うた
 のこころは えたれども―えたれど 女を見て―女を思ひて あ

さまどり…人にかたるな―ナシ なりひらは―なりひら 月や
 あらぬ…なりまさるかな―ナシ 吹くからに…けふにやはあら
 ぬ―ナシ 宇治山の―宇治の わがいはは…いふなり―ナシ
 流なり―りう (イ校なかれ、三本如此) なり おもひつつ…か
 ねてしるしも―ナシ おもひ出でて…おいやしぬると―ナシ
 しげき木の葉―しげれる木の葉 おほかれど―おほけれど す
 べらぎの―すべぎみの よつのととき―よつの月 四月十八日に
 ー四月の八日に 御書のところの―御書どころの 万えふしふ
 にいらぬふるきうたみづからのをも―万えふしふにいらぬうた
 どもふるきみづからのをも たてまつらしめ給ひてなん―たて
 まつらしめ給ひて 人をもいはひ―人をいはひ あふさか山に
 ーあふさか山に 春夏秋冬にもいらぬ―春夏秋冬ともいはぬ 浜
 の真砂のかずおほく―浜の真砂のおほく それまくらことばは
 ーそれまく (イ校ろ) らことばに 人のみみにおそり―人のみ
 みにおそれ たのしみかなしみ―たのしびかなしび こひざら
 めかも―こひざらめやも

卷一

6 花とや見らん―花とや見えん 7 花とみゆらん―花と
 みゆるか 8 みやすむ所ときこえける時―みやす所と申しけ

六人部是香書き入れの「建久五年本古今集」

る時 我なれど―はれなれど 9 花ぞ散りける―花さきに
 けり 12 谷風―山風 14 大江千里―よみ人しらず 15
 はるたてど―はるたちて 鶯のなく―鶯ぞなく 23 在原行平
 朝臣―在原行平 24 寛平御時―寛平御時の 26 春しもぞ―と
 きしもぞ 27 ぬける―ぬくか 柳か―青柳 28 さへづる―
 なくなる 36 ぬふてふ―ぬふといふ 38 する人ぞしる―し
 る人ぞみる 40 よめる―よみける それとも―みれども 41
 はるの夜うめのはなをよめる―ナシ (白紙で文字脱落) 42 久
 しく―久しう かの家のあるじ (七字脱落しイ校) いひ出し
 て侍りければ―いひ出したりければ 45 梅の花の―梅の (イ
 校梅の花の) うつろひぬらん―うつろひにけん 50 いたくな
 わびそ―ものな思ひそ 52 しかはあれど―しかあれども 58
 さくらをよめる―さくらをみて 61 よみける―よめりける
 年だにも―ことしだに 62 よみける―よめる 67 見にまう
 できたりける―見にきたりける (イ校まうできたりける)

卷二

72 しぬべし―しぬべし 75 さくらの花の―さくらの
 ぞうく法師―ぞうくう法師 (以下皆同じ) 76 ちり侍りける
 を―ちりけるを 77 ひとさかりありなば―いとさかりありて

七一

ば 78 あひしれりける人ーあひしりてなんやりける人 80

わづらひける時ーわづらひ侍りける時 なれりけるーなりにた

る 81 みかは水にー水に 82 ちりけるをよめるーとくちり

けるをよみける（イ校ちりはべりけるをよめる） さかずやは

あらぬーさかずやあらぬ [83の次に86の歌あり] 87 ひえ

にのぼりてーひえにのぼりて花をみて つらゆきーナシ 88

涙かー涙ぞ 90 花は咲けりー花ぞ咲ける 92 うつろふ色に

ーうつろふ色を 95 ほとりにまかれりける時ー里にまかりけ

る時 まじりなんーまどひなん 96 千世もーとしも 99 あ

つらへつくるーあとらへつくる 101 さく花はー桜ばな 104

うつろへる花をみてよめるーナシ（イ校うつろへる花をみてよ

める） 107 おとらましやはーおとらざらまし 108 みやすん

所ーみやす所（以下皆同じ）歌合せんとてー合せんと 109 羽

風にー羽ふきに 112 我身もともにー我身も人も 114 思ふ心

はー思ふ心も 115 女のおほくあへりけるにー女どものおほく

侍りけるに 117 まうでたりけるにーまうでたりける夜 うち

にも花ぞ数りけるーうちにぞ花も散りける 119 花山ー花の山

121 こじまのさきーこじまのくま 124 ほとりにーつらに 125

きよともがうた也ーきよともが也 127 はるのとくすぐるを

よめるーまたはあはれといふ事をかれつにつつみひてはるのと

くすぐるをよめる 134 歌合に春のはてのうたー歌合の歌（イ

校歌合に春のはてのうた）

卷二

135 この歌はーこの歌 人まろが也ー人まろが歌也 よめる

ーよめりけり 136 あはれてふーあはれといふ 138 まだしき

ほどーまだしきとき 139 よみ人しらずーナシ（イ校よみ人し

らず） 140 きぬらんーきつらん 141 けさきなきーけさきな

く 144 いその神寺ーいその神の寺 鳴くをよめるー鳴くをき

きてよめる 148 から紅にーから紅の 150 打はへてーをりは

へて [153「さみだれに：」と 154「夜やくらき：」の歌の順

序が逆] 159 題しらずーナシ 161 さぶらひにてをのこども

の酒ーナシ（白紙で文字脱落） 162 なきけるーなける 我うち

つけにー我もうちつけに 163 むかしべやーいにしへや きつ

らんーきぬらん 164 なき渡るらんーなき渡るかな 165 心も

てー心もち 167 つかはしけるーやれりける みつねーナシ

168 かよひぢはーかよひぢに

卷四

172 いなばそよぎて秋風の吹くーいなばもそよと秋風ぞ吹く

173 秋風の：ーこの歌ナシ（イ校アリ） 175 はしーふね 177

- 御時―御時に おほせられける時―おほせられける時に 179
 なぬかの日の夜―なぬかの日 181 待ちもこそ―あへもこそ
 182 わかるる時―わかるるをり 184 もりくる―をちたる 191
 かず―かぜ 193 これさだのみこの家の―これさだのみこの
 196 まかれりける―まかりける 197 悲しかるらん―わびしか
 るらん 204 思ふは―みわば (209 「いとはやも……」の歌の
 左に、「又はあきはぎのしたばもいまだもみぢあへなくに」)
 210 かりがねは―かりがねの 211 うつろひにけり―いろつ
 きにけり 212 くる船は―くるかりは かりにぞ―ふねにぞ
 215 詞書ナシ―題しらず ふみ分け―ふみて 218 藤原としゆ
 きの朝臣―としゆきの朝臣 223 ある人のいはく此歌は―この
 歌はある人 御歌なりと―御歌となんまうす たわわに―とを
 をに 230 左のおほいまうちぎみ―おほいまうちぎみ(イ校左
 のおほいまうちぎみ) 234 めには―めにも 238 まかりたり
 ける時―みなまかりける時 かへるとて皆―かへるとて 243
 神とみゆらん―神とみゆるは 244 ゆふかげの―ゆふぐれの
 247 後は―いろは 248 みかど―みかどの のらなる―のになる

卷五

249 やすひで―あさやす (253 「神無月……」の歌の左に、

六人部是香書き入れの「建久五年本古今集」

- 「又はわがかどのわさだもいまだかりあげねば」 254 もみ
 ぢばに―もみぢばは 255 をのこどもを―のこども おなじ
 えを―おなじえに 256 いし山に―いし山でらに 257 秋の木
 の葉を―秋のやまべを 262 あたりをまかりける―あたりにあ
 りける 268 うへしうゑば―うつしうゑば 270 殿上―うへめ
 しあげられて―めしありければ つかうまつるとなん―つかま
 つりたりけるなり 271 寛平御時―寛平の御時 273 いたれるか
 たを―いたれりけるを 274 かたをよめる―かたを見てよめる
 275 思ひし花を―思ひしきくを 276 はかなきことを―はか
 なきこと 279 平さだふん―平仲也 282 ひさしく―ひさしう
 こもり侍りけるに―こもり侍りける時に 283 この歌は―この
 歌 御歌也―御歌 293 かけりけるを―かけるを みなどには
 ―みなそこは 301 船かとぞ見る―船とこそ見れ 303 あへぬ
 ―やらぬ 305 もみぢのちる―もみぢちる 馬をひかへて―馬
 ひかへて 306 これさだのみこの家の歌合のうた―ナシ 309
 まかれりけるに―まかれりけるひ 311 思ひやりて―思ひよせ
 て 313 ゆかん―いなん ぬさを―ぬさに

卷六

316 きよければ―きむければ 317 吉野の―たかきの 319

かつぞけぬらしーかつとけぬらし 329 雪のふるをー雪のふりけるを 331 ふりかかれりけるーふりかかりける 332 まかれりけるーまかりける 336 まがひせばーうつりせば

卷七

343 やちよにーまませ 344 ちとせーいのち 345 すむ千鳥ーなく千鳥 346 御代をばーみちよを 347 思ひでにせよー思ひでにせむ 348 神のー神や 349 業平ーゆきひら 351 宮の五十ーきみに御五十 ちるしたにーちるもとに すぐるーすぐす 356 賀にー賀 すすめにかはりてよみ侍りけるーすすめにあつらへられてよみたる 361 色まさり行くー色かはりゆく 364 生れたまへりけるー生れたまへる

卷八

369 きよふーきよふむ 371 たちなむ後はーたちなむときは 372 ともだちの人のくにへまかりけるによめるーナシ(イ校アリ) 375 給はりてーたうはりて ただーナシ 377 人の家に

やどりてあかつきーナシ(イ校アリ) 378 かよふーふかき

379 あづまへーあづまのがりへ たびかなーよひかな 380 まかりける人にーまかりける時人に 381 よみけるーよめる 382

あひしれりけるーあひしりける 385 つかひにーつかひにて

386 こひやわたらんーもえ(イ校きえ)やわたらん 388 神なびー神なみ をしみけるにーをしみければ 389 よみけるーよ

める 藤原かねもちーかねもち 390 こゆるとてーこゆとてよみけるーよめる 391 藤原かねすけの朝臣ー藤原かねすけ 392

夕さりつかたー夕つかた みえななんーみえぬかな(イ校みえななん) 396 おはしましけるーおはしける 397 いたくーい

たう まかりいで侍りけるーまかりいでける をりにさかづきをーをりにきのつらゆきさかづきをとりて 398 返しー返しに

よめる 399 物がたりーあひ物がたり 400 白玉はー白玉を

403 いづれをーいづれの 405 とものりーきのともりの

卷九

406 むかしーナシ いでたりけるーいでたちける 407 小野

たかむらの朝臣ー小野たかむら(イ校小野たかむらの朝臣)

410 おもしろくーおもしろう 木のーナシ(イ校木の) 411 かぎりなくーかぎりなう わびてーナシ(イ校わびて) はや

ーはやく 日もくれぬー日くれぬ はしとあしとあかきーはし
 あかき これはーあれは いひけるをききてーいひければうち
 ききて 412 つれてーむれて まかりけりーまかりけるが よ
 めるとなんいふーよめり 413 まうでくとて道にてーまかりけ
 る道にて おとーおとみぶのよしなりがむすめ 416 ねぬーへ
 ぬ 417 くの湯へーくにへ（イ校くにの湯へ） 人々ー人々
 の 418 いひけらくーいはく かはらにーかはに 天川原ー天
 の川原 420 おはしましけるーおはしましたりける

卷十

422 そぼちつーそぼちては 424 みだれけるーみだれたる
 425 壬生忠岑ーにぶのただみね 426 あなうめにーみなうめに
 427 かにはざくらーにはざくら つらゆきーきのつらゆき
 429 ふかやぶーきよはらのふかやぶ 431 とものりーきのとも
 のり 432 秋はきぬー秋たちて 433 あふひ かつらーかつら
 あふひ 思はざるべきーうらみざるべき 434 人めゆゑー人
 めゆゑに 442 なければやーなげなるを 444 そむるばかりをーそ
 むるばかりぞ 445 けづり花ー侍りける花 448 よみ人しらず
 ーよみ人しらず根本 449 ぬば玉ーむば玉（イ校うば玉） 450
 たかむこのとしはるー一本読人不知 452 たけゆくーたちゆ

六人部是香書き入れの「建久五年本古今集」

く 453 真せい法師ーしせい法師 455 兵衛ー兵衛（「ただふ
 さがもとに侍りける」と細字） 〔456「波の音の…」の歌の次
 に、「おきのる やみこ こじま 小野小町 おきのるてみを
 やくよりもわびしきはみやここじまのわかれなりけり」〕 457
 さきちるーさきくる 〔462「夏草の…」の歌の次に、「そ
 めどの あはた おふしのあやもち うきよをばよそめとのみも
 のがれゆくくものあはたつ山のみもとに」〕 463 ちらすばか
 りをーちらすばかりと 468 はじめーはじめに

第下冊 古今和歌集序

紀淑望ー紀淑光 倭歌ー和歌 其花ー其華 通情者也ー通情
 者 大起ー大興 教誠ー教戒 古之ー古 澆漓ー澆醜 孤栄ー
 獨栄 大夫之前ー丈夫之前 二三人而已ー二三人 其詞花ー其
 詞甚華 猿丸大夫ー猿丸大夫 宰相ー相公 雅情ー輕情 陛下
 御宇千今ー陛下御宇天下于今 四月十八日ー四月十五日（イ校
 十五日、一イ校十一日）

六人部是香の注記（抄出）

○仮名序の「人の世となりて…」

β本なりてよりぞみそもじあまりとつづけたり。但しよりぞの下に半行ばかり白紙をのこして朱にて、すさのをのみことよりぞの十一字を書き加へたり。按ふに朱もて書きいれたるは、多く御本に云々ありとやうに見えたれば、家隆卿の校合せられし御本と云にかくありしから、謄写のとき既に書き入るべしきしたがまへにて、白紙となしおきて書き加へられしものなるべし。さて此本によれば、なりてよりぞ、尊よりぞとありて、よりぞと云事の忽重複かみれるにても、後に加はりつる文なる事知られたり。

○仮名序の「四月十八日」

β本加筆云、重沈思猶十八日者奉詔日也。於撰上日者不注歟。於真名序淑望擬作也。仍唯以奉日書注歟。貫之集六日とある書写兆歟。

○86「雪とのみ」の歌

按に、β本に良風のはる風は云々の次に題はなくして、ただくろぬしとばかりありて、春雨の降るは涙の歌を入れ、次にひえにのぼりてのはしがきの歌入りたり。按にやつねの雪とのみの歌は、β本の如く上友則の前に入りたるぞよろしかるぞよろしかるべき。そは同じはしがきの重複すべきいはれなければ也。又黒主の歌をここに挙げたるはわろし。さては良風と一座にてよめる歌となりて、雨中の歌なれば良風の歌にかなはず。こは今本次第ぞよろしかるべき。さてβ本の次第并二つの貫之の名なれば、春雨のふるは云々、山高み云々、

桜花散りぬる風の云々、此三首黒主の歌となれり。

○真名序

是香按に、仮字序真字序の論古くよりさまざまに論ひ来れど、仮字序を本にして真字序は後に模したるものなることは、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰、淵変為瀬之声、寂々閉口、砂長為巖之頌、洋々満耳、とあるの数件、いづれも古歌に依りてかける文にて、もと仮字序にかけるをばかくべきにあらず。されば家隆卿自筆本に重沈思云々、於真名序淑望擬作也とあるは、当時正しき伝説ありてかかれしなるべし。

〔付記〕六人部是香の「古今和歌集」の閲覽をお許しくださいました、向日神社神官の六人部克己氏に深く感謝申し上げます。

(本学教授—国文学)